

氏名	金 俊来
学位の種類	博士(美術)
学位記番号	第111号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	現代生活における漆の色彩表現に関する研究 -変わり塗りを活かした作品制作-
審査委員	主査 教授 栗本 夏樹 准教授 竹浪 遠 准教授 安井 友幸 教授 渡辺 信明 准教授 吉岡 俊直

論文の要旨

本論文は伝統工芸の素材である漆を、色彩表現という観点でとらえ、現代生活における新たな価値と可能性を探ることを目的とする。漆は、東洋の芸術において長い伝統を誇る素材である。東アジアを中心に日本の蒔絵、韓国の螺鈿、中国の彫漆など、それぞれの地域を代表する重要な工芸分野となってきた。けれども、近代以降の工業化の中で、化学塗料やプラスチックなど、漆器に代わる多様な素材が開発され生活形態も変化したことで、漆の社会的なニーズは減少してきた。そのため、現代において漆の価値をどう継承・発展させるかが重要な課題となっている。

漆の色は、黒や赤のイメージが一般的に強い。しかし、漆の技法の中にはそれ以外にも、多数の色漆を塗り重ねて研ぎ、複雑な効果を出す「変わり塗り」と総称される様々な表現方法が存在する。江戸時代に刀の鞘などに用いられて流行し、多様で豊富な表現力を持った技法であるが、今では一部の作家や若狭塗、津軽塗のような地域特産物などに限定され、活用頻度が低いことは大きな課題である。

本論文では、上記の現状に問題意識を持ち、伝統的な「変わり塗り」技法を軸として、その表現と応用に関する研究を行った。特に日本の伝統的な変わり塗りの一種である絞漆(しぼうるし)を利用した色彩表現を追求し、様々な対象における制作事例を通じて、現代生活の中での漆の活用方式について考察した。制作対象としては、①平面による絵画作品、②生活共有空間に設置する立体作品、③生活の中で使用する工芸的な作品、④現代美術としての大型作品の4分野を取り上げ、多角的な制作を通じて、漆の新たな表現と活用方法を提示した。

①平面による絵画作品に関しては、色漆の補色の考察、塗り面積の調節、また、特定の面積をそれぞれ異なる色で塗るなど、多様な試みを通じて、変わり塗り表現の可能性を考察した。制作した作品は、既存の絵画的な用法で色漆を用いる漆絵とは異なり、なおかつ、漆の暖かい色感を保ちな

がカラフルな表現方法を実現することができ、変わり塗りの伝統技法を絵画の新たな表現方法として確立できたと考える。

②生活共有空間に設置する立体作品については、東京のマンションのエントランスに設置する作品を複数制作し、変わり塗りを活かした漆作品が生活空間において果たし得る可能性について考察した。マンションのエントランスでは、美術館での展示とは違い、作家個人よりは、他者のための作品という意味合いが強くなる。そこで、マンションの居住者に朝の活力を与えられるよう、光や太陽をイメージした形態と色を追求するなど、生活の質を高めることを目標に制作を行い、自己の作品観を拡張する結果を得た。制作方法についても、コンピューターソフトウェアによるシミュレーションを用いて、企画を注文者にプレゼンする方式を活かし、満足度を高めるきっかけとなった。

③生活の中で使用する工芸的な作品では、漆の工芸としての原点に立ち返り、日常で実際に使用できる工芸的機能を持った作品の創造を目標とした。日常生活の調度としての漆作品が与える楽しさをテーマに、穴のある座卓を制作した。使用に際して「休憩」のイメージと使用上での「遊び」の要素の両立を目指して、穴という遊戯的要素を取り入れた、四季をイメージした四色一組の座卓を制作し、それぞれに男女の恋の心情を象徴する二つの穴をあけた。収納面にも配置して壁に掛けて鑑賞できるようにした。完成後に行った体験会では、予想していた反応に加え、四台の座卓を様々に組み合わせて空間を作るなど、更なる使用法も提案され、新たな可能性の広がりを感じることができた。

最後の④現代美術としての大型作品に関しては、上述の作品制作の経験から得られた漆に対する考え方や筆者の色彩観などをもとに、変わり塗りの色彩表現や作品の形と色の関係など、漆作品のもつ新たな価値と筆者の制作観から総合的に考察を行った。大型の漆作品の制作方法として、五つの直方体からなる、幅5メートル余りの一組の作品を構想した。各中央部分には、大きな動物が這った跡のような大きな凹みを設けて、運動感を与え、筆者が漆作品で一貫して追求してきた「安定」や「余裕」などのイメージを伝えるべく赤色系の色を用いて「エーテル」（光を伝達すると考えられた仮想の物質名）と名付けた。本作品の制作を通じて、大型漆作品の一つのモデルケースを得、展示方法についても、新たな可能性を見出すことができた。そして、私が考える漆の持つイメージを、体現できたのと同時に、漆の大型作品の制作においてより積極的で多様なアプローチを考えられる契機ともなった。

以上、変わり塗りの技法を研究し、様々な形式や用途の作品制作を行うことにより、絵画的な鑑賞、生活共有空間での果たす役割、工芸的な実用における遊戯性、多様な空間での現代美術の大型作品の展示など、現代生活における様々な状況・環境に応じた漆の新たな活用の方法を実制作として提示するとともに、今後へ向けての更なる可能性にも言及した。

審査結果の要旨

■本審査全体に関して

金俊来氏は、韓国で水墨画を学び、日本では絵画から漆の世界へと展開し、博士課程においては現代生活の中にかに漆を活用できるか、というテーマで取り組んでいる。そして今回の発表は、丁寧な資料データの分析と独自の解釈を駆使し、絞漆という伝統的な技法の実践をもとに新たな漆の可能性を探った内容であった。また自身の作品を平面作品、公共作品、工芸作品、そして現代芸術としての立体造形作品の4つのタイプに分け、それぞれを関係づけながらの幅を持たせた研究は、新しい独自の取り組みであると言える。

最初に取り組んだのは、漆による平面作品である。絞漆と色漆による変わり塗り技法を制作に生かすための実験や工夫を重ねてオリジナル技法と呼べる方法を編み出している。その作品は、既存の用法で色漆を用いる漆絵とは異なり、漆の暖かい色感を保ちながらカラフルな表現方法を実現している。制作した絵画作品は、2016年の京都での個展を通じて成果発表し、漆の伝統技法を用いた色漆による平面作品への手応えを掴んでいる。

次に取り組んだのは、都市空間の一つであるマンションのエントランスに漆作品を提案する試みである。これは、建築会社が学生を対象に行ったコンペティションであるアート・ミーツ・アーキテクチャー・コンペティションに応募し、2015年に優秀賞、2017年に最優秀賞を受賞したことで実現への道筋ができた。現在まで、東京方面の5カ所のマンションのエントランスにコミッションワークとして漆造形作品を設置している。コミッションワークの場合、そこで暮らす住人への配慮が不可欠である。作品に光や太陽をイメージした形態と色を追求し、人々に活力を与えることのできる表現となった。また、金氏が韓国で遊具会社のデザインを行っていた経験を生かしてコンピューターグラフィックによるシミュレーションを用いた作品提案が大きな推進力となった。

次に取り組んだのが、生活で使って楽しめる漆の工芸作品の提案である。日常生活の調度としての漆作品が与える楽しさをテーマに穴のある座卓を制作した。機能的には意味のない穴を座机の天板に空けることで生まれる遊戯的要素が特徴である。制作した座机を使って体験会を数回行い、参加者の反応をアンケートで収集し分析した。作者が予想していなかった使用法も提案され、新たな可能性の広がりを得ることができた。

本研究のまとめとして制作したのが作品「エーテル」である。今までの研究や作品制作の経験で得られた漆に対する金氏の考え方や色彩観などをもとに作品の形と色の関係などを考察し、変わり塗りの色彩表現を積極的に用いた立体作品として、漆造形の新たな可能性に挑戦した作品である。本作品では、金氏が漆作品で一貫して追求してきた「安定」や「余裕」などのイメージを伝えるべく赤色系の変わり塗りをを用いて「エーテル」（光を伝導すると考えられた仮想の物質名）と名付けられた。本作品は、五つの直方体からなる、幅5メートル余りの組作品である。各パーツの中央部分には、大きな動物が這った跡のような大きな凹みが設けられ、作品に運動の痕跡を感じさせる表現となっている。

論文の最終章の「エーテル」に関する論述では、その言葉やタイトルの意味を考察しながら論を

進めている。しかし論文やプレゼンテーションの中での作品に使用した赤色に関する記述では、『赤色は“願いの色”であり落ち着く感じ、安定感を表す色』と限定するなど、やや感覚的で偏りのある定義づけは気になった。作品を見る限り、怖さとか近寄り難さとも言えるある種の凄みのようなものが感じられ、その相反する両面が作品には内包されている。そのことが自覚され論文に加わるならば、さらに作品の見え方が膨らむであろう。

また論文中の「エーテルの構想 (p. 118)」の箇所において、自身の作品の大型化の必要性について論じる中で、現代芸術作品例をいくつか取り上げているが、いずれも巨大さだけに共通点を探ったことはやや安易である。もっと個々の作家の独自性や、表現の内容に言及し、自作品との整合性を追求する必要があるだろう。

しかしながら、本審査提出作品「エーテル」は、漆という伝統的な自然素材が持つ本来の魅力を踏まえつつ、絵画的色彩表現という視点も絡めた、意欲的な作品に仕上がっていた。「穴」と表現される凹凸の実際の陰影をも取り込むことで、表面の絞漆のテクスチャーからくる深い美しさが強調され、近くからもそして遠くからも見るものを静かに圧倒する。そのキューブ状の立体型が5つ配列されたシンプルな形と、幾重にも施された漆の色彩が渾然一体化し、サブテーマである“漆の変わり塗りを活かした”まさに絵画的な立体造形を創出することに成功していたと言えよう。

審査教員から以下の様な意見が出された。

①論文の中で色漆にこだわり、漆と色の関係について論述している割には、他の作品と比べて、最終的な作品「エーテル」からは漆の良さである潤いのある艶があまり見受けられないという点で、私のこれは意図したものかという問いに対し、最終的にはこれで良いという回答がなされた。作品の完成については最終的な判断は作者が行うものであるが、完成予想図にあるような、もう少し漆の持つ独特な艶があった方が良かったのではと感じている。

②穴のある座卓の制作において、遊びの要素である穴の中を触った時の触り心地に対して考察して作っているかという私の問いに対して、形については考えているが触り心地については考えたことはないとの回答が得られた。これにおいても、使うもので穴があれば指を入れることも踏まえ、質感の要素を加えて、漆ならではの触り心地を考察することで新たな楽しみが増えるのではないかと感じた。

③色彩が本研究の重要な要素で、その分析として、自らの経験、母国の文化などを取り上げ、色彩の根拠がどのように生成されてゆくのか分析する努力は感じられた。しかし、所々、「私にとって、赤い色は祈りの色」など、作家性が現れ、共有できる論が成り立たない部分もあった。

④対象範囲を広げ過ぎたせいか、美術、デザインに対するコメントに、若干、違和感があった。ただ、漆と色の関係性は研究対象としては非常に興味深く、今後、科学的な知識、客観的な考察（都合のいい結果ではなく、逆説的に捉えるなど）が加われば、漆作品の発展と需要にとって重要な研究になると感じた。

以上のように金俊来氏の研究は、漆の色彩、変わり塗りを軸に、平面作品、公共作品、工芸作品、そして現代芸術としての立体造形作品と、そのアウトプットの幅を広げ、且つ、技術的な研究や、工房のリサーチなど、その活動を裏打ちする試みもあり、本人が言う、漆のイメージを払拭したいという、意気込みは十分感じられる内容であった。発表に関しても、写真や図を多用し、各章の方向性は明確で、わかりやすかった。また、論文の研究テーマの設定、章構成、論述形式、論述内容の各点から、博士論文としての水準を満たしていると判断された。よって金俊来氏の博士課程（後期）課程、本審査を審査員全員一致で合格とした。

■論文に関して

本論文は、伝統的な漆の技法である変わり塗りをを用いて、現代生活における漆の活用の可能性を考察したものである。金氏は、近代以降の工業化のなかでプラスチックなどの新素材の普及にともなって、東洋における伝統的な素材である漆のニーズが減少していることに問題意識を抱き、現代の日常生活において漆の価値を継承・発展させることを目標とした。制作の手法としては、多数の色漆を塗り重ねて研ぎ、複雑な効果をもつ「変わり塗り」と総称される伝統的な塗り技法に注目し、その一種である絞漆（しばうるし）を用いて、現代生活に適応した漆工作品創出の可能性について多角的に追求し、その制作・考察結果を論文にまとめた。

構成は序論と6つの章および結論からなっており、前半では本学博士課程に進学する以前の制作経験と、進学後に実施した色漆の素材・技法に関する調査研究成果を述べている。後半では博士課程における制作・研究の過程がほぼ時間の経過に沿って論述される。

概要を述べると、第1章「おいしい絵の展開」では、色漆を用いた制作・研究の起点となる自身の色彩観がどのように形成されたのかを、高校時代のMTV（ミュージックビデオ）、大学の絵画学部時代における色を味覚的観点で解釈した「おいしい絵シリーズ」の制作、半年間のフィリピン留学における南国の色彩などから分析する。

続く第2章「色漆と絞漆表現」では、色漆の成分や製造法を漆専門店の取材も交えて調査するとともに、色漆を重ねた際の発色の違いを実験し、背景色が白より黒のほうが、発色がよいことを明らかにする。また、先行する作家との比較を行い、従来の補色による対比的な色彩の取り合わせではなく、同系色の明度を段階的に上げてゆく「漸進的な塗色法」を自身の特徴と位置づける。

その上で、第3章「絞漆を利用した平面作品」では、絞漆による絵画表現を追求し、輪郭線の表現方法やグラデーションの効果、スフマート技法の応用などを試みて、自己の体験や記憶に基づく様々なイメージを表現した複数の作品を制作している。

次の第4章「生活共有空間における立体漆作品の制作」では、建築会社の主催したパブリック・アート公募展への入賞を契機に、マンションのエントランスに設置するための立体作品を5点制作している。建築主や居住者のニーズを考慮し、マンションの住人に活力を与えられるよう、光や太陽をイメージした色と形態を追求するなど、生活の質を高める造形を追求している。

第5章「穴のある座卓の制作」では、漆の工芸としての原点に立ち返り、日常で使用できる座卓を構想する。単なる座卓としての機能だけでなく、不定形の穴をあけることで遊戯性も与え、四季をイメージした4点の座卓を制作し、完成後に体験会も行って、参加者の発想による使用法の広がりも示される。

その上で、第6章「修了作品「エーテル」の制作」では、これまでの制作経験から得られた漆に対する考えや色彩観をもとに、五つの立方体からなる幅5メートル余りの大型作品を制作する。近代以前に光を伝達すると考えられた仮想の物質名をタイトルに、見る者に緊張感の一方で安らぎや安定性も感じさせる多様な表現を追求して締めくくりとしている。

以上、氏の論文は、前半の議論が本研究の表現や技法の基礎となっており、後半における各制作も、前の章を受けて次の章の制作が展開するという緊密な連なりをもっており、テーマである現代生活における漆の新たな可能性を多角的に提示できている。

平面から立体、工芸、大型作品へと可能性を提示していく多彩な制作であるが、そのベースにあるのは、楽しさ、明るさ、ユーモアなどのプラスのイメージである。それらが経糸のように志向され、そこに母国での水墨画の専攻歴、兵役やフィリピンへの留学、玩具デザイナーとしての経験や、本学留学後の結婚、子供の誕生、マンション設置作品の公募への参加・入賞など折々の環境や出来事が緯糸のように絡み合っ、豊かなアイデアや思索が紡ぎ出され、作品へと結実していく。その思考態度は内省的であり、自己の制作を対象とする実技論文としてのスタイルに則している。

ただ、例えば第6章の修了制作に赤を基調色として用いた理由を、それが筆者の人生経験の中で「願いの色」である旨の説明がなされる点などは、客観性を欠いているとの指摘があった。また、自己の作品との比較として取り上げられた先行する作家や作品については、その表現の核心部分に迫るような丹念な記述が欲しいとの意見が出された。論拠となる情報の出典についても、追加の必要な箇所が指摘された。

このような改善の望まれる部分はあるものの、金氏の制作は、既に述べてきたとおり幼少からの自然体験、美術大学を卒業し、留学後に家庭を持ちながら研究を続けてくる中で得た経験を掘り下げて制作するところにウエートがあり、その体験自体、特別なものというよりは日常生活や人生のなかで普遍的に存在する共有可能なものであるため、上記の指摘された点は、論旨や構成自体に大きな修正を迫るものではない。

以上、研究テーマの設定、章構成、論述形式、論述内容の各点から、博士論文としての水準を満たしていると判断する。